

ヒメオドリコソウ

牧 幸 男

2月、立春が過ぎると気持ちは少し春に傾く。中務卿・具平親王は玉葉和歌集(1312)のなかで、早春の野辺を次のように詠っている。

夜もすがら 思ひやるかな 春雨に 野辺の若菜の いかにもゆらむ

夜に降った春雨に野原の若菜は青々と芽を出し始めることだろう。春の訪れが間近である風景が伝わる歌である。若菜とは、春の初めに生える食用の菜であるが、その頃になると野草も生えてくる。

花の少ない冬から植物が一斉に芽吹く春の季節はなんとなく、心が軽くなるような気持ちになる。英語で Spring は春であるが、語原が「はねる、湧き出る、はじけるもの」であることに由来している。春は心が踊るようになる、新たな生命が出現する季節である。特にヨーロッパの人々が春を待ちあびる様子、そのひとつをオランダ(ノルドワイク)で経験した。次の写真は春の祭典の花パレード Bloemencorso である。出し物は全て花で飾られ、その豪華さはよくぞここまで飾ったと感心するしかなかった。



地上では、あらゆる野草は少し手を抜くと、すごい勢いで繁茂し、主客の若菜の成長を抑えるほどになってしまう。我が家の庭でも葺(ナズナ)、繁縷(ハコベ)、ホトケノザ、ヒメオドリコソウ等どこから種子が飛んできたのか不明だが、ともかく元気良く芽を伸ばし始める。過ごしやすい春が来たと思っていると、野草はすごい勢いで繁殖し始め、放っておくと始末に困ってしまう程成長してしまう。

よく観察していると、これ等の野草、雑草と呼んだ方がよいのかもしれないが、時代と共に種類が変化していることに気がつく。子供の頃の記憶では、生家の裏の畑ではホトケノザが多く、ヒメオドリコソウを目にする事は少なかった。現在の我が家の庭では、ヒメオドリコソウが勢力を強めている。この傾向は、散歩の途中に目にする道端や空地、畑等で群落を作るこの花の姿に出会うことが多いので確かであらう。繁殖力が強く在来植物を駆逐しているのかもしれない。



ヒメオドリコソウの群落

ヒメオドリコソウは、ヨーロッパ、小アジア原産のシソ科の1~2年草で、原生地以外でも道端や空地、畑等でありふれた野草で、北アメリカでは地域により侵入植物種に分類されている繁殖力の強い植物である。我が国には明治時代中期に帰化した外来種で、主に本州を中心に分布している。茎は四角形短い毛があり、根元で枝分かれし、草丈は10~25cm まれに30cm程度に成長するものもある。葉は対生し丸味のある卵形で長さ2cm位、上面は葉脈が網状に窪み、しわがあるように見え、上部では暗紫色を帯び、もむと悪臭がする。花は明るい紫赤色の唇形で1~3個つける。唇片は兜の形で、下唇片先が2裂で赤い斑点があり、上部の葉の脇か

ら外側に向かって開き、上から見ると放射状に並ぶ。温暖な地域では年間を通じて開花し、他の花が少ない時期にはミツバチにとっては重要な蜜の供給源となる。このような帰化植物の優勢な姿、身の回りの植物に関心を持っていると、その変化に気が付くであろう。

南アフリカ共和国を訪れた時、ガイドは「南アフリカには在来種が数多く生育している。しかし、最近では安易に外来種を輸入してきたので、在来種に弊害が生じてきている。このため在来種を保護する動きが生まれてきた。一方で、この地で外来種であるジャカラランダ*の花が満開となると、外国から多くの観光客がこれを目当てに訪れるが、輸入植物のこの木の事を考えると、複雑な気持ちになってしまう。」と説明してくれた言葉を忘れることができない。

注*:ジャカラランダ *Jacaranda mimosifolia* 原産地ボリビア、アルゼンチン等の南米、ノウゼンカズラ科の高木で、大木(約7~8m)にならないと開花しない。別名キリモドキ、和名は紫雲木しうんぼくである。

ヒメオドリコソウは、しばしばホトケノザ (*L. album* 本誌2023年4月参考) と共存することが多く、葉と花の色が似ているので、区別が難しいという人がいる。大きな違いは、ホトケノザの花は上向きに、ヒメオドリコソウの花は横向きに咲くので区別は容易である。



ジャカラランダの花



ヒメオドリコソウの花

類似植物には、オドリコソウがある。生育地は半日陰に多く生える多年草で、成長すると高さが30~50 cm、花の段の間が広いのに対して、ヒメオドリコソウは互いに接近してつくため、見かけの印象はかなり異なる。他に、白花ヒメオドリコソウや1990年代に帰化した切れ葉ヒメオドリコソウ、黄色い花を付けるツルオドリコソウも生育している。

雑草類はあまり詩歌の対象にならない。理由は植物が小型である、植物名が長い事などから詠われることが少ないのであろう。

落し物 さがしに戻る 道すがら ヒメオドリコソウ 愛らしく咲く 鳥海 昭子
背を丸め 踊子草の 花をみし 保田 一豊

中国・朝鮮半島から日本に分布するオドリコソウ *Lamium album* の名前の由来は、葉の姿が笠をかぶった踊り子が、茎を取り巻いて輪になって踊っているように見えることが由来である。ヒメオドリコソウはヨーロッパ原産の越年草で背丈・葉や花の大きさがオドリコソウの半分以下で小さいため「姫」の名を冠して呼ばれるようになった。しかし、よく観察すると、オドリコソウでは花の段の間が広いが、ヒメオドリコソウは互いに接近しており、見かけの印象はかなり違っていると思うが、詮索無用と言ったところか。漢名は、姫踊子草である。学名は *Lamium purpureum* で、属名はギリシア語で *laipon* は喉で、花の筒が長くのど状に見えるから、種小名は紫色の意で花の色による。

ヒメオドリコソウは日本に渡来後歴史が浅いため、薬用の認識はないが、欧米では薬用植物として利用されている。イギリスでは糖尿病、利尿作用、下剤、発汗作用、止血作用が認められている。また、中国の民間療法では、「月経不順や泌尿器系疾患に、オドリコソウの花を乾燥したものを煎じて服用する。腰痛や打撲傷には、全草を濃く煎じた液で湿布する。腰痛には、乾燥したオドリコソウ適量を、木綿の袋に入れて、薬湯料として入浴する。」の記述がある。

食用についての記述もあるが、ここでは割愛する。

花言葉は「陽気」「愛嬌」「快活」「春の幸せ」である。



ヒメオドリコソウ